

4 乳幼児の発達の概要

乳幼児期は子どもの心身の発育・発達が著しく、また、基礎が形成される。しかし、一人一人の子どもの個人差は大きいため、発達の過程や生活環境など、子どもの発達の全体的な姿を把握しておく必要がある。

1 子どもと大人との関係

子どもは、身体的にも精神的にも未熟な状態で生まれ、大人に保護され、養育される。その際、大人と子どもの相互作用が十分に行われることによって、将来に向けての望ましい発育・発達を続け、人間として必要な事柄を身につけることができる。中でも重要なことは、人への信頼感と自己の主体性を形成することである。子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることによって、自分も大人を愛し、信頼していくようになる。大人との相互作用によって情緒的に安定し、大人の期待に自ら応えようという気持ちが育ち、次第に主体的に活動するようになる。子どもは自発的に身近な事物や出来事に興味を示して働きかけたり、周囲の者に対して関心を持ったりするようになる。その中で、自分の気持ちを明確に表現し、自分の意思で何かをするようになり、自我が芽生えてくる。そして、自分が主体となって選択し、決定して行動するという自己の能動性に自信を持つようになり、言葉や思考力、自己統制力を発達させていく。

2 子ども自身の発達

子どもの発達は、子どもとその子どもが生きる環境内にある人や自然、事物、出来事との相互作用を通して進んでいく。

特に中心となることは、人との相互作用である。子どもは、乳幼児期を通じて、大人との交流や応答、大人から理解されることを求め、自分が大人に理解されたように自分からも大人を理解しようとする。この大人との関係を土台として、次第に他の子どもとの間でも相互に働きかけ、社会的相互作用を行うようになる。

仲間との相互作用を通して、自分の考えを相手に伝え、相手の言うことに耳を傾けて理解すると同時に、いつも自分の思い通りにはならないことも知る。お互いの意見が食い違ったときやいざこざが起こったときには、自分の感情をコントロールしたり、時には自分のやりたいことを抑えて妥協・譲歩したりするなど、自己主張や自己抑制の必要性や方法も学び取っていく。仲間と共に、様々な経験をすることは、子どもの社会的、情緒的、道徳的、知的発達にとって不可欠である。

また、子どもの発達には個人差があり、それぞれの子どもが生まれつき持っている生理的・身体的な諸条件や、養育環境の違いによって、その発達の進み方や現れ方が異なることを認識することが重要である。

3 子どもの生活と発達の援助

子どもの発達を促すためには、大人の側からの働きかけばかりでなく、子どもからの自発的、能動的な働きかけが行われるようにすることが必要である。

子どもの活動には、大別して、食事、排泄、休息、衣服の調節などの「生活」にかかわる部分と、「遊び」の部分とがあるが、子どもの主体的活動の中心となるのは「遊び」である。子どもの遊びは、子どもの発達と密接に関連して現れるし、また逆にその遊びによって発達が刺激され、助長される。したがって、遊びを通して行う保育は重要であり、その際、教師は子どもと生活や遊びを共にする中で、一人一人の子どもの心身の状態をよく把握しながら、その発達の援助を行うことが必要である。

また、様々な条件により、子どもに発達の遅れや園生活に慣れにくい状態がみられても、その子どもなりの努力が行われているので、その努力を評価して、各年齢別の発達の一般的な特徴を押しつけることなく、一人一人の子どもの発達の特性や発達の課題に十分に留意して保育を行う必要がある。

4 発達の主な特徴

(1) 6か月未満児

母体内から外界への環境の激変に適応し、その後は著しい発育・発達がみられる。月齢が低いほど体重や身長が増加が大きく、次第に皮下脂肪も増大し、体つきは円みを帯びてくる。視覚や聴覚などの感覚がめざましく発達し、自分を取り巻く世界を認知し始める。

この時期の子どもは発達の可能性に満ちているが、大人の援助なしでは欲求を満たすことはできない。しかし、子どもは、笑う、泣くという表情の変化や体の動きなどで自分の欲求を表現する力を持つ。そのような表現により子どもが示す様々な欲求に応え、身近にいる特定の大人が適切かつ積極的に働きかけることにより、子どもと大人との間に情緒的な絆が形成される。これは対人関係の第一歩であり、自分を受け入れ、人を愛し、信頼する力へと発展していく。

生後3か月頃には、機嫌のよいときは、じっと見つめたり、周りを見まわしたりしている。周りで物音や声がすると、その方向をみる。足を盛んに蹴るようになる。寝ていて自由に首の向きを変えることができ、腹ばいで頭を持ち上げるようになり、動くものを目で追えるようになる。小型のガラガラ等を手にあてると少しの間握ったり、振ったりする。微笑みも生理的なものから、あやすと笑うなど社会的な意味を持ち始める。子どもの要求の受け止め方や大人の働きかけに対して快と不快の感情が分化してくる。



「ア・エ・ウ」等の音を出したり、「ブーブー」とか「クク」という声を出したりする。授乳中に哺乳瓶に触れていたり、いじったりする。満腹になり乳首をくわえたまま気持ちよさそうに眠ることもある。

生後4か月までに、首がすわり、5か月ぐらいからは目の前のものをつかもうとしたり、手を口に持っていったりするなど手足の動きが活発になる。

生理的な快・不快感を表現する方法は、感情を訴えるような泣き方をしたり、大人の顔を見つめ、笑いかけ、「アー」「ウー」などと声を出したりするなど、次第に社会的、心理的な表現方法へと変化する。さらに、身近な人の声を覚えたり、音のする方向に首を向けたり、近づいてくるものを見たり、ゆっくり動くものを目で追ったりするようになる。生後4か月を過ぎると、腕、手首、足は自分の意思で動かせるようになり、さらに、寝返り、腹ばいにより全身の動きを楽しむようになる。

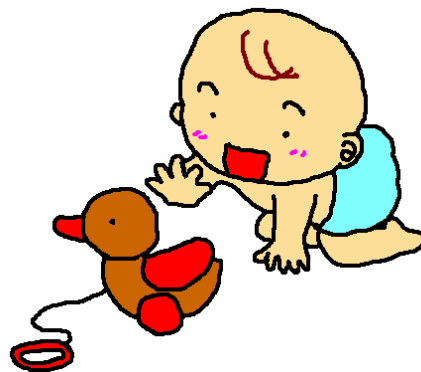
また、眠っている時と、目覚めている時とがはっきりと分かれ、目覚めている時には、音のする方向に向く、見つめる、追視する、喃語を発するなどの行動が活発になる。

(2) 6か月～1歳3か月未満児

6か月を過ぎると、身近な人の顔が分かり、あやしてもらおうと非常に喜ぶようになる。6か月頃より、母体から得た免疫は次第に弱まり、感染症にかかりやすくなる。この時期の座る、はう、立つといった運動や姿勢の発達、子どもの遊びや生活を変化させ、直立歩行へと発展する。手の運動なども発達して、次第に手を用いるようになる。さらに、言葉が分かるようになることや、離乳食から幼児食へと変化するることによって、乳児期から幼児期への移行を迎える。7か月頃からは一人で座れるようになり、座った姿勢でも両手が自由に使えるようになる。

この時期には人見知りが増えるが、一方では、見慣れた人にはその身ぶりをまねて「ニギニギ」をしたり「ハイハイ」などをしたりして、積極的にかかわりを持つようになる。この気持ちを大切に受け入れ応答することが、情緒の安定にとって重要である。こうした大人との関係の中で喃語は変化に富み、ますます盛んになる。

9か月頃までには、はうことや両手にものを持って打ちつけたり、たたき合わせたりすることができるようになる。身近な大人との強い信頼関係に基づく情緒の安定を基盤にして、探索活動が活発になってくる。また、情緒の表現、特に表情もはっきりしてきて、身近な人や欲しいものに興味を示し、自分から近づいていこうとするようになる。



さらに、簡単な言葉が理解できるようになり、自分の意思や欲求を身ぶりなどで伝えようとするようになる。1歳前後には、つかまり立ち、伝い歩きもできるようになり、外への関心も高まり、手押し車を押したりすることを好むようになる。また、喃語も、会話らしい抑揚がつくようになり、次第にいくつかの身近な単語を話すようになる。

(3) 1歳3か月～2歳未満児

歩き始め、手を使い、言葉話すようになる。この時期には、運動機能の発達がめざましく、体つきは次第にやせぎみになっていく印象を受ける。感染症の罹患が多く、この時期の病気の大半を占めるといってもよい。

つかまらずに歩けるようになり、押す、投げるなどの運動機能も増す。生活空間が広がり、子どもはこれまでに培われた安心できる関係を基盤として、身近な人や身の回りにあるものに自発的に働きかけていく。その過程で、生きていく上で必要な数多くの行動を身につけていく。例えば、身近な人の興味ある行動を模倣し、活動の中に取り入れるようになる。つまむ、めくる、通す、はずす、なぐりがきをする、転がす、スプーンを使う、コップを持つなど運動の種類が確実に豊かになっていく。こうした新しい行動の獲得によって、子どもは自分にもできるという気持ちを持ち、自信を獲得し、自発性を高めていく。また、大人の言うことが分かるようになり、呼びかけたり、拒否を表す片言を盛んに使ったりするようになり、言葉で言い表せないことは、指さし、身ぶりなどで示そうとする。このように、自分の思いを親しい大人に伝えたいという欲求が次第に高まってくる。そして、1歳後半には、「マンマ、ホチイ」などの二語文も話し始めるようになる。

さらに、ボールのやりとりのような、ものを仲立ちとした触れ合いや、ものの取り合いも激しくなり、また、あるものを他のもので見立てるなど、その後の社会性や言葉の発達にとって欠かせない対人関係が深まり、象徴機能が発達してくる。このような外界への働きかけは、身近な人だけでなくものへも広がり、大人にとっては、いたずらが激しくなったと感じられることも多くなる。

情緒の面でも、子どもに対する愛情と大人に対する愛情とに違いが出てくるし、嫉妬心も見られるなど分化が行われる。この時期は、自発性、探索意欲が高まるが、まだまだ大人の世話を必要とする自立への過程の時期である。



(4) 2 歳児

歩行の機能は一段と進み、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能が伸び、体を自分の思うように動かすことができるようになり、身体運動のコントロールもうまくなるので、リズムカルな運動や音楽に合わせて体を動かすことを好むようになる。同時に指先の動きも急速に進歩する。

発声はより明瞭になり、語いの増加もめざましく、日常生活に必要な言葉も分かるようになり、自分のしたいこと、してほしいことを言葉で表出できるようになる。このような発達を背景に行動はより自由になり、行動範囲も広がり、他の子どもとのかかわりを少しずつ求めるようになる。



感染症に対する抵抗力は次第についてくるが、感染症は疾病の中では最も多い。

日々の生活の中での新たな体験は、子どもの関心や探索意欲を高め、そこで得られた喜びや感動や発見を、自分に共感してくれる大人や友達に一心に伝えようとし、一緒に体験したいと望むようになる。このような子どもの欲求を満たすことによって、様々な能力も高まっていき、自信を持つことができるようになる。

したがって、大人の手を借りずに何でも意欲的にやろうとする。しかし、現実にはすべてが自分の思い通りに受け入れられるわけではなく、また、自分でできるわけでもないの、しばしば大人や友達との間で、自分の欲求が妨げられることを経験する。

ところが、この頃の子どもはまだこうした状況にうまく対処する力を持っていないので、時にはかんしゃくを起こしたり、反抗したりして自己主張することにもなる。これは、自我が順調に育っている証拠と考えられる。この時期にも、子どもは周りの人の行動に興味を示し、盛んに模倣するが、さらに、物事間の共通性を見出したり、概念化したりすることもできるようになる。また、象徴機能や観察力も増し、教師と一緒に簡単なごっこ遊びができるようになる。

(5) 3 歳児

この時期までに、基礎的な運動能力は一応育ち、話し言葉の基礎もでき、食事・排泄などもかなりの程度自立できるようになってくる。これまでは、何かにつけ大人に頼り、大人との関係を中心に行動していた子どもも、一人の独立した存在として行動しようとし、自我がよりはっきりしてくる。

そして、他の子どもとの関係が子どもの生活、特に遊びにとって重要なものとなってくる。他の子どもとの触れ合いの中で、少しずつ友達と分け合ったり、順番を守って遊んだりできるようになる。この段階では、子ども自身は友達と遊んだつもりになってい

